

総合教育センターだより

平成16年3月15日発行 第89号

第18回 秋田県教育研究発表会

授
賞
式講
演
 演題「学校教育に望むもの」
講師 東京国立近代美術館 館長 辻村哲夫氏
各
分
科
会
場

教育研究発表会Data

- 総参加者数：929名
- 発表数：111点
(発表内訳)
 - ・一般応募・奨励賞応募者……58
 - ・海外コミュニケーション研修
参加者………4
 - ・総合教育センター研究班等…9
 - ・総合教育センター研修員……40

「第18回 秋田県教育研究発表会」を終えて

副所長 佐藤光咲

第18回秋田県教育研究発表会が、2月12日(木)、13日(金)の両日にわたって、当総合教育センターで開催されました。年次進行で実施されてきた新学習指導要領が、本年度全校種にわたって展開されたことを反映してか、発表数は昨年よりも7本多い111本を数えました。発表内容は、「確かな学力」の育成を図る少人数指導や学習評価の在り方、地域ぐるみで子どもたちの豊かな心の育成を目指した実践、更には不登校への対応やLD児等への支援に関するものなど多岐にわたりました。どの会場においても熱心な話し合いと情報交換が行われ、本県教職員の教育研究への意欲と当面する課題解決への思いが強く感じられました。

さて、1日目の開会式後に行われた当センターの研究発表に触れてみます。「生徒指導」「少人数指導」「教職員研修」「学期制」「学習評価」をそれぞれテーマとする発表には多くの方々が集い、参加者の問題意識の高さを感じさせました。また、多様化する教育課題に、より適切に対応できるように研修部の枠を越えた研究体制のもと、その推進に取り組んできたことも本年度の特色といえます。研究の成果は研究紀要としてまとめ、今年度中に各学校等に送る予定です。

2日目には、東京国立近代美術館長の辻村哲夫氏から「学校教育に望むもの」と題して記念講演を行っていただきました。辻村氏は、「教師が、本来の教育に専念できる工夫を」、「子どもへの愛情と付けたい力を明確にもって、繰り返し指導にあたることの大切さ」など、新学習指導要領に込められた思いを具体例をあげながら話され、参加者に多くの示唆と深い感銘を与えてくれました。

今回の研究発表会が、各校そして教職員にとってそれぞれの教育課題を解決し、学校教育の活性化に少しでもお役に立つことを願っています。開催に当たりご協力をいただいた多くの皆様から感謝を申し上げます。

(中) 道 徳

〔自らの生き方を問う道徳の時間の工夫〕

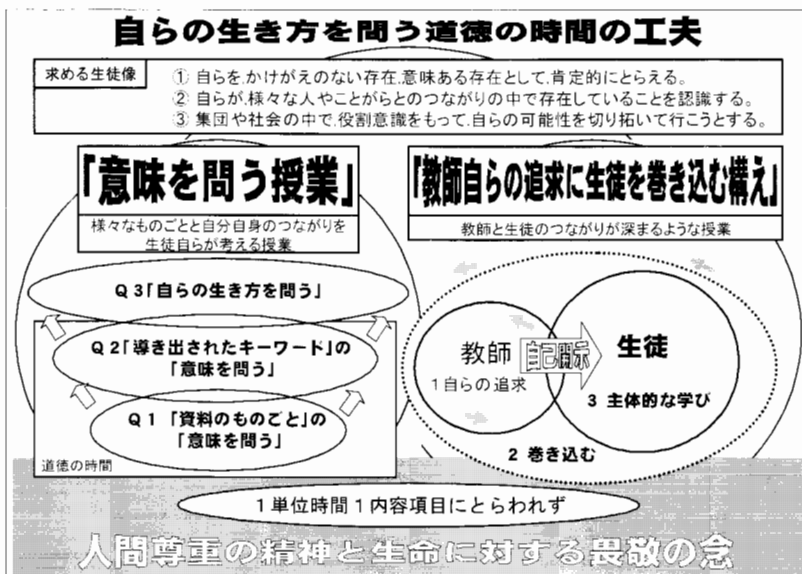
教職研修部 研修員 伊 藤 香

生徒に限らず、学ぶことの意味、働くことの意味、そして生きることの意味等、様々な「意味」を見失うことは、漠然とした不安をもたらし、自己肯定感を希薄にします。

本研究は、「意味を問う授業」と「教師自らの追求に生徒を巻き込む構え」を二本の柱としました。教師が生徒に対して一方的に「意味を問う」のではなく、教師自らが問う姿を自己開示し、その追求に生徒を巻き込み、教師と生徒が共に悩み、考え、共に学ぶ授業を目指しました。意味を問うことは、様々なものごとと、自分自身のつながりを見つめ直すことになりました。授業で生徒は、資料のものごとの意味や、話し合いで出されたキーワードの意味、道徳の意味、生きることの意味等を教師と共に追求し、生きることの大切さを感じ、自らの生き方を考えていこうとする姿を見せました。授業に当たっては、「生きることには意味がある」という前提が欠かせない点だったと考えます。

今、学校教育そのものが意味を問われているように思います。生徒一人一人が

居甲斐（いがい）を感じ、意味を見出せる教室作りが（教師も含めた）一人一人の生き甲斐につながっていくのではないのでしょうか。今後「自らの生き方を問う道徳の時間」の実践を一つの切り口として、教師の在り方、学校の在り方を追求していきたいと考えます。



(中) 美 術

〔「絵をみて考える」活動を重視した学習を通して

鑑賞への関心を高める指導の工夫〕

教科研修部 研修員 関 口 琢 也

本県美術科の課題の一つに鑑賞指導の充実が挙げられていますが、これは、これまで鑑賞指導に消極的であった私自身の課題にはかなりません。そこで、この度研修の機会を得て、絵画鑑賞を通して鑑賞の授業改善に迫る研究に取り組みました。

所属校生徒の実態調査を行ったところ、鑑賞への関心が希薄な生徒の多くは「見方が分からない」という理由をもっていることが分かりました。この実態を踏まえ、「自分なりの見方ができるようになれば関心も高まるのではないか」「絵をみて考える活動を工夫すれば見方を養うことができるのではないか」という仮説を立て、研究をスタートさせました。

研究の基本構想は、異なる鑑賞方法で題材を構成し、その一連の授業提示によって鑑賞への関心を高めるといったものです。「親しむ」「楽しむ」「見方を広げる」「見方を深める」を時間毎のテーマにした鑑賞方法とそれに即した「みる視点」を創出することで、段階的に見方を学べるようにしたいと考えました。

この構想に基づき、所属校において次のような授業を実践しました。

- ①『名画のキーワード』…気に入った絵を見つけて印象をキーワードで表す活動。
- ②『どっちの絵画ショー』…浮世絵と印象派絵画を比

較鑑賞して味わう活動。

③『絵画でメイクドラマ』…一枚の絵をみて場面を想像する活動。

④『絵を囲む会』…作品の題を考え交流する活動。

とりわけ、キーワードや絵の題名のように、感じたことを別のかたちに置き換えて、それを手がかりに話をさせる鑑賞方法が生徒の感想を引き出すのに有効であったと感じています。

これらの授業を通して、生徒の感想から見方の深まりの様子があがりました。また、事後のアンケート結果からは「以前より鑑賞が好きになった」との回答も多く見られ、今後も学習を積み重ねることで関心を高められると確信しました。

今回は入門編ということで、自由な発想で絵をみることから始めたのですが、今後、さらに見方を深められるように探究していきたいと思っています。



(小)総合的な学習の時間

〔豊かな人間性をはぐくむためのデジタル交流学習広場の試み〕

情報教育研修部 研修員 花田 一 雅

豊かな人間性をはぐくむためには、ゆっくりと価値あるものに直接触れさせることが大切だといわれています。そうした理由から私も小学校で植物栽培を行った経験があるのですが、いかにして児童を主体的に継続して取り組ませるかが課題でした。

その課題を解決するために、情報通信ネットワークを活用してみようかと考えました。植物の様子について、他校と継続して情報交流をしながら豊かな人間性をはぐくもうという試みです。

インターネット上に独自のデジタル交流学習広場「ひまわり広場」を構築し、ひまわりの栽培を中心にした交流学習を、総合的な学習の時間を中心に展開しました。

第4学年 「ひまわり大作戦！」26時間の実際

1 学習の計画を立てる。…2★

- ・どんな植物を育てるのか
- ・どこの学校と交流するのか
- ・どんな情報を交換するのか



【電子掲示板の学習】

2 交流の準備をする。…4★

- ・ビデオレターの制作
- ・ひまわりの種まき
- ・電子メール、電子掲示板の使い方についての事前学習

3 「ひまわり広場」で交流をする。…17

- (1) ひまわり観察記録の共有 (A-コラボの利用)
 - ・デジタルカメラの活用
- (2) 学校や地域の紹介
 - ・インタビューやアンケートによる情報収集
 - ・ワープロソフトを活用したまとめ
- (3) 共同プロジェクトの展開
 - ・収穫した種の名前の相談 (e-talkの利用) ★
 - ・ひまわりの種の配布

4 活動の振り返りをする。…3★

★は研究協力校で授業に参加した時間

ビデオレターの呼びかけに、小学校1校、県立養護学校1校がこの交流に協力してくださいました。

情報通信ネットワークを活用したことにより、児童は主体的に継続して課題に取り組むことができました。そして、ひまわりの観察やその情報の共有、学校間での共同プロジェクトを通して、児童に豊かな人間性をはぐくまれることが分かりました。また、課題を見付け、調べ、情報を発信するという学習活動を通して、課題解決能力や情報活用能力も高まることが分かりました。来年度、一緒にひまわりを育てながら情報交流をしてみませんか。

「ひまわり広場」：www.akita-c.ed.jp/~forum022/

(小)特殊教育

〔通常学級におけるADHDのある子への支援の在り方の一考察〕

ーオリジナル・マニュアルを使ってー

特殊教育・相談研修部 研修員 石山 廣子

「オリジナル・マニュアル」より

特別支援教育の対象の一つに、注意欠陥／多動性障害 (ADHD) があります。学習困難な状態を示す時があり「なぜこのような行動をするのだろう」と理解や対応に悩むことがあります。しかし、2年間の担任の経験から、ADHDのある子どもも毎日を精一杯生きていることを感得しました。支援をしていく際に大事なことは、情緒の安定を図ること、そして、ADHDについて正しく理解し自尊心を高めていくことだと思います。

本研究では、ADHDのある児童 (小学校高学年) のオリジナル・マニュアルを試作しました。作成する際に留意したADHDの四つの基本の問題から一つの例をマニュアルと併せて紹介します。

校内の職員でこれを使用することで、ADHDのある子どもへの理解が深まり、校内での支援の一方策となるといった感想が寄せられました。

ADHDの特性を理解した付き合い方としては、

- ① 特性をつかむためにじっくりと観察すること、
- ② やるべき事の手順を箇条書きで表にしておくこと、
- ③ 学習や生活上のルールを体得できる工夫などがあります。

いずれの対応も、自尊心を高め、情緒の安定を図るためのものです。

「今日も楽しかった」と思える日々を作るための支援はどの子どもにも行っていることだと思います。それをADHDの特性を理解した上で行うとさらにスムーズにできると思います。

5 クラスでの教科学習は？ ①

国語や算数など努力の割には伸び悩んでいる部分が見えてきます。その点については、少人数での指導、またはできるのであれば一対一の指導がベストです。

1時間内の板書の量が多すぎる点、どこを見るかよくわからなくなってしまう。板書は、少しずつ目で見て読めがわかるようにします。

小ボードに「きょうはここまでやります」という1時間内のゴールを提示しておくこと、集中力が持続するようです。

先生の指示は一瞬懸命聞いています。発問に対して、答えようと努力しています。挙手して答えるパターンは繰り返し練習しました。発問とずれているときに「は、わかったよ。」と認めると安心しています。

ルールを具体的に。

いすに座って手をひざに



全体に指示を出した後、個別に指示。



支援の必要性は？

- ① どうしても理解に時間がかかっている場合は、そばに行つて「ここは、あとでやろうね。こっちは問題に挑戦してみよう。」と、先に進ませるのもいいと思います。
- ② 問題がたくさん見えず過ぎて迷っているようなときには、周りの問題を隠してあげると、取り組みやすいようです。

月・日	行動観察の記録

～1年間の研修員生活を振り返って～

研究発表までの道のり

教科研修部 研修員 平澤 亮子

「研究主題の設定」から始まった研究の道のり。私に課せられた研究領域は「総合的な学習の時間」でした。自分の中の様々な課題から視点を絞り込み、独自性のある主題を決めることは想像以上に難しく、研究の厳しさを感じたスタートでした。

長いと思われた発表までの月日も、主題が決まり具体的な構想や検証のための授業計画など必要な内容が見えてくると、急に短く感じられました。学校を離れての研究は、子どもを見失いそうな不安や壁にぶつかることもあり、秋の所属校での検証授業が、研究の実践的な方向を確かめ、課題を明らかにする貴重なものでした。それらをまとめ、研究発表を迎えましたが、4回の部内発表会と1月の所内発表会でご指導いただき、また研修員同士が意見を交換し合い、たどり着いた発表でした。

センターや所属校の方々に支えられ歩いた、発表までの道のりが、私にとって大きな財産であると、今実感しています。

新たな人々との出会い・ふれあい

特殊教育・相談研修部 研修員 伊藤 忠宏

「ふれあい」といえば、中村雅俊の曲が真っ先に頭に浮かんできます。その曲の中で、悲しみに出会った人がどうするかというと、ある人のことを思い出して、そばにいてほしいと望みます。

この一年の研修で多くの人々と出会いました。同じように研究に励む年齢も校種も異なる研修員、指導主事の方々、不登校などで相談に訪れる子どもたち。その人たちと接する中で感じたことは、人とかかわることの大切さです。

私も研究テーマが決まらずに苦しんでいた時に、同じ部の研修員や指導主事の方と話をすることで自分の考えもまとまっていき、救われた気持ちになりました。「人は人の中で人になる」という言葉を実感しました。

曲の中で、人は一人では生きていけないものだからふれあうのだと結んでいます。これから出会い、ふれあう人に安心と元気を与える、そんな教師であり、人でありたいと思っています。

研究と修養の充実を目指して、必読図書や推薦図書等を読み、報告書を提出する課題があります。以下はその一部です。

「高等学校学習指導要領解説 国語編」

教職研修部
研修員 工藤 正隆

従前の学習指導要領と大きく変わった点の一つに、各科目における内容の取り扱いがある。「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」及び「言語事項」の3領域1事項から内容を構成するよう改められている。

私自身の授業を振り返ってみると、B・C領域についてはある程度実践してきたが、A領域についてはほとんど実践していなかった。そのため、今後、どう対処していくべきか非常に不安である。

小・中学校では、昨年度から現行の学習指導要領に則った授業が展開されている。現在私の周りには、多くの小・中学校の先生方がいらっしやるので、どのようにA領域の指導がなされているのか、教えていただこうと思っている。

とにかく、私の授業方法を全面的に改善しなければ、本書の目標の伝え合う力を高めることにつながらない。生徒主体の活発な言語活動ができる場面を、授業に多く設定するように工夫していきたい。

「教師のパフォーマンス学入門」

インターネット授業推進室
研修員 市川 尚樹

私が子どもに意思を伝えるとき、言葉に頼る場面が多かったように思う。この本には、「言語が受けもつ意志伝達の割合は、25～30%であり、残り70%は、顔の表情や距離の取り方、体の動かし方、時間の使い方、色の使い方など様々な非言語表現によって伝達される。」と紹介されている。その中で興味深く思ったのは、目の役割である。子どもが「教師に関心をもってもらえた。」と満足感を得るのは、授業時間の60%程見つけられたときだという。子どもの信頼を得るためにも、授業しているとき下ばかり見ていたり、一点だけ凝視したりしない教師の姿が望まれると思う。教室全体の子どもたちに目配せすることや子どもから相談を受けたときに子どもの目線で話を聞くことの大切さをあらためて感じさせられた。

本書で紹介された様々な教師のパフォーマンスをすることによって、子どもとの心の距離をさらに縮めることができるだろうと思う。

「情報教育の方法と実践—中学校編—」

情報教育研修部
研修員 長谷川 忠直

秋田県では「英語とコンピュータが使える秋田の子ども」というスローガンのもとに、IT教育を重点の一つに据えている。我々教師はこのことを学校教育でどう具現化していくのかということが求められており、そのヒントを満載しているのがこの本である。編者は情報教育の第一人者である赤堀侃司先生である。

生徒の「情報活用能力を伸ばす」ために、情報教育の三つの目標の分析から始まり各教科の学習ではどうしたらよいのか、また総合的な学習の時間でのポイントや指導する側の在り方などが実践例とともにいねいに述べられている。「なるほど」と思うような内容で校種・教科の区別なく全ての教師に読んでほしい一冊である。情報教育を研究テーマとした自分にとってはバイブルのような存在となった。

◆「教育研究資料総合目録」刊行停止のお知らせ

『教育研究資料総合目録』の刊行を今年度から停止することになりました。これまで収集してきた全国の貴重な教育資料、教育用ソフトウェア、電子顕微鏡画像、学習指導案については、「花まるっ教育ネットkna」を通じて総合教育センターのホームページ・教育情報データベースから検索できるようになっています。(一部IDが必要)またレファレンスにも応じておりますので、一層ご活用ください。